

児童生徒の自己指導能力を育てる研究

—全ての教職員で行う発達支持的教育相談を通して—

〈生徒指導研究グループ〉

引地 千枝美¹、鈴木 達也²、渡部 雄大³、赤坂 圭介⁴、泉 順也⁴、一丸 都⁴
角田市立角田中学校¹、加美町立中新田小学校²、宮城県角田高等学校³、宮城県総合教育センター⁴

【要約】 生徒指導提要¹⁾では、児童生徒に必要な力として自己指導能力を挙げている。生徒指導の実践上の4つの視点を踏まえ、児童生徒の多様な背景に対応し、日常的・先行的に行う教育相談が、発達支持的教育相談である。このことを全ての教職員が実践することで、児童生徒が必要に応じて他者に相談できるようになれば、自己指導能力の育成につながると考えた。研修セットを作成・検証したところ、教員の発達支持的教育相談の理解の深化と実践に有効であり、児童生徒の自己指導能力を育てる一助となった。

【キーワード】 発達支持的教育相談、自己指導能力、生徒指導の実践上の4つの視点、研修セット

1 はじめに

(1) 主題設定の理由

小学校、中学校及び高等学校の学習指導要領^{2) 3)}第1章総則では、児童生徒の発達の支援における生徒指導の充実について示されている。そして、学習指導要領解説総則編^{4) 5)}では、「生徒指導が、一人一人の生徒の健全な成長を促し、児童（生徒）自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すという生徒指導の積極的な意義を踏まえ、学校の教育活動全体を通じ、学習指導と関連付けながら、その一層の充実を図っていくことが必要である」と述べられている。生徒指導提要では、自己指導能力を、「児童生徒が、深い自己理解に基づき、『何をしたいのか』『何をすべきか』、主体的に問題や課題を発見し、自己の目標を選択・設定して、この目標の達成のため、自発的、自律的、かつ、他者の主体性を尊重しながら、自らの行動を決断し、実行する力」であると示されている。この力を育成するには、生徒指導の実践上の4つの視点である「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」「自己決定の場の提供」「安全・安心な風土の醸成」に留意することが大切であるとされている。

これら4つの視点に留意し、実施できる活動の一つに教育相談がある。教育相談は、生徒指導の中心的な役割を担う。一人一人に焦点を当て、望ましい人間関係の形成や、主体的・能動的な自己決定を支えていく活動であり、多様な背景を持つ児童生徒の自己指導能力を育成するために有効であると考ええる。

現代の生徒指導において重要とされるのは、全ての児童生徒を対象とし、日常的・先行的に行う視点である。この視点で行う教育相談は発達支持的教育相談である。これは、様々な資質や能力の積極的な獲得を支援する教育相談活動であり、個に寄り添った働き掛けを行う。学級活動、学校行事、部活動等

だけではなく、授業における児童生徒への働き掛けも含まれるため、全ての教育活動で発達支持的教育相談は実践可能である。

日常的・先行的に行う生徒指導として、発達支持的生徒指導がある。これは、全体と個への働き掛けである。例えば、教員が朝教室に行く際に、「おはよう」と一人一人、どの児童生徒にも等しく声を掛けるような行動であり、挨拶ができる集団づくり等を目指している。一方、児童生徒の表情から「おはよう。元気がないようだけど、どうしたの?」と個に寄り添って声を掛けるのは、発達支持的教育相談である。これは、声を掛けられた機会をきっかけに、児童生徒が自分の気持ちに気付いたり、他者に相談する力を育んだりすること等を目指している。この取組は、問題の早期発見にもつながるものである。

令和5年度宮城県児童生徒学習意識等調査結果⁶⁾によると、教員は「一人一人に声を掛け、励ます」「一人一人の話をよく聴く」という取組を実践しており、児童生徒も教員の働き掛けを実感していることが分かる（表1）。

表1 令和5年度宮城県児童生徒学習意識等調査結果

質問事項 (学校質問紙調査)	小学校第5学年	中学校第2学年
	肯定的回答	肯定的回答
児童生徒一人一人に、積極的に声を掛け、励ましていますか	98.3%	97.0%
児童生徒一人一人の声に耳を傾け、話をよく聴いていますか	97.9%	97.0%
質問事項 (児童生徒質問紙調査)	小学校第5学年	中学校第2学年
	肯定的回答	肯定的回答
先生から声を掛けられたり、励まされたりしていますか	88.9%	88.8%
先生はあなたの話を聞いてくれますか	94.6%	94.6%

一方で、当該児童生徒が翌年4月に回答した令和6年度全国学力・学習状況調査（宮城県分）結果⁷⁾では、「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」の質問事項に対する肯定的回答は全国平均よりも低い（表2）。

表2 令和6年度全国学力・学習状況調査（宮城県分）結果
※仙台市を除く

質問事項	項目	小学校第6学年	中学校第3学年
困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか	肯定的回答	62.7%	64.2%
	全国との差	-4.4%	-3.3%

表1・表2より、教員から励まされたり、話を聞いてもらったりしていると感じる児童生徒の割合より、相談できると回答した児童生徒の割合は少ない。

第2期宮城県教育振興基本計画（改訂版）⁸⁾では、基本方向1「豊かな人間性と社会性の育成」の目標に、表2の質問事項を基にした指標がある。宮城県は令和10年度までに、この項目の肯定的回答が約5%増えることを目標としている（表3）。

表3 基本方向1「豊かな人間性と社会性の育成」目標指標

目標指標	項目	小学校第6学年	中学校第3学年
困りごとや不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できると思う児童生徒の割合	現状値（令和5年度）	64.5%	61.1%
	目標値（令和10年度）	70.0%	67.0%

児童生徒について、生徒指導提要では、「信頼できる大人（教職員や保護者等）に援助希求を表出することは『適切に依存できる』ネットワークを築いて『自立』（大人になること）へと踏み出す一歩である」と示されている。また、援助希求の一つの方法として、相談することを挙げている。この二点から児童生徒が相談できることは自立に向けて重要であることが分かる。

困りごとや不安があるときに、自分で解決するだけでなく、必要に応じて他者に相談することは、状況を判断し、行動を選択して実行するため、自己指導能力を生かした行動の一つであると考えられる。この行動は、児童生徒が安心して学校生活を送ることができることに加えて、問題行動等の未然防止のためにも重要である。

令和5年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（宮城県分）の結果⁹⁾によれば、宮城県の暴力行為及びいじめの重大事態発生件数は全国平均よりも多く、児童生徒の不登校出現率は、小学校、中学校及び高等学校全てにおいて全国平均よりも高い。困難や課題を抱える児童生徒の背景は多様化・複雑化しており、児童生徒が困りごとや不安を有する際に、一人一人が状況に応じた適切な行動を取れるよう、日頃から実施できる発達支持的教育相談が必要であると考えられる。

よって、個に寄り添った発達支持的教育相談を通して、児童生徒の自己指導能力の育成を図ることとした。

(2) 研究目標

児童生徒の自己指導能力の育成について、全ての教職員で行う発達支持的教育相談の具体化を通して、明らかにする。

(3) 目指す児童生徒の姿

困りごとや不安があるときに、自分で解決するか必要に応じて他者に相談するかを判断し、行動する

ことができる児童生徒

2 実態調査

(1) 目的

児童生徒が必要に応じて他者に相談できるようになるために、どのような支援を教員に求めているのかを明らかにする。また、教員については、教育相談についての捉えや児童生徒が教員に相談できるように日頃行っている取組・工夫を明らかにする。

① 児童生徒用

・児童生徒の相談に関する意識や行動の調査・分析

② 教員用

・教員の教育相談に対する意識や取組に関する調査・分析

(2) 調査対象

① 児童生徒用

・令和6年度長期研修員の所属校の児童生徒（小学校2校、中学校2校、高等学校2校）
・対象学年（小学校第1学年～高等学校第3学年）
・有効回答者数2676名（小学生1128名、中学生534名、高校生1014名）

② 教員用

・令和6年度長期研修員の所属校の教員（小学校1校、中学校2校、高等学校2校）
・宮城県総合教育センターの研修会に参加した教員
・有効回答者数282名

(3) 調査期間

・令和6年6月26日～8月30日

(4) 調査方法

・オンラインアンケートフォーム及び質問紙による調査

(5) 調査結果

小学生を対象に、教員にどのようなことをしてもらおうと相談しやすいかを調査した（表4）。上位4項目と5番目以降の項目に差があり、児童は、受容的・共感的な働き掛けを求めている傾向が強い。

表4 小学生の実態調査の結果

あなたなら先生にどのようなことをしてもらおうと相談しやすいですか。特に当てはまるものを3つまで選んでください。(n=1128)	
項目	割合
自分の気持ちを分かってくれる	48.2%
どうすれば良いか一緒に考えてくれる	41.4%
自分の良いところや頑張っているところを認めてくれる	37.8%
話を聴いてくれる	36.4%
いろいろな話をしてくれる	25.7%
笑顔でいてくれる	23.8%
自分がうまく言えないことを代わりに言ってくれる	22.8%
一緒に遊んでくれる	16.7%
話し掛けてくれる	13.7%
約束を守ってくれる	13.7%
その他	0.2%

中学生・高校生を対象に自由記述形式で調査し、テキストマイニングを行った（図1）。「寄り添う」

「親身な」「聞く」等がキーワードであり、受容的・共感的に受け止めてもらうことを望んでいることが分かった。

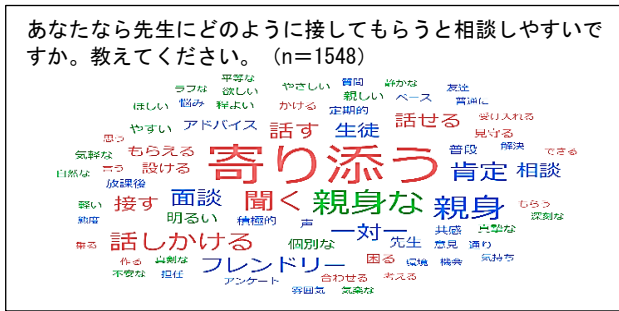


図1 中学生・高校生の実態調査の結果

教員には、児童生徒が相談しやすいように日頃から意識して取り組んでいるかを調査した（n=282）。その結果、「取り組んでいる」が37.9%、「どちらか」というと取り組んでいる」が55.3%であり、90%以上の教員が取り組んでいることが分かった。そのように回答した教員に、その内容や工夫について調査したところ、「児童生徒の良いところや頑張っているところを認めている」を意識している教員が最も多い結果となった（表5）。

児童が特に求めている「自分の気持ちを分かってくれる」「どうすれば良いか一緒に考えてくれる」や生徒がキーワードとして多く挙げた「聞く」に対応する教員の働き掛けは、「児童生徒の意見や考えを、まずは受け入れて聴いている」「一緒に考え、最後は、児童生徒自身が決められるようにしている」である。この項目を意識している教員の割合は多くはなかった。よって、児童生徒が求めている受容的・共感的な働き掛けを教員が実践できるようになることが必要であると考えた。

表5 児童生徒が相談しやすいように、教員が日頃から意識している内容や工夫についての調査の結果

項目	割合
児童生徒が教員（自分、または他の教員）に相談しやすいように日頃から意識している内容や工夫を3つまで選択してください。	
児童生徒の良いところや頑張っているところを認めている	43.5%
遊んだり、雑談したり、子供と接する時間を意識してつくっている	42.7%
目立つ子供だけでなく、目立たない子供の表情や言動にも気を付けて見ている	42.7%
笑顔でいる等、相談しやすい振る舞いをしている	37.0%
児童生徒の意見や考えを、まずは受け入れて聴いている	36.2%
1日1回必ず話し掛けている	35.0%
自分自身のことについて、話している	24.0%
一緒に考え、最後は、児童生徒自身が決められるようにしている	23.6%
児童生徒との約束を守っている	10.6%

発達支持的教育相談の認知度を調査した結果、80%以上の教員が内容を知らないことが分かった(図2)。

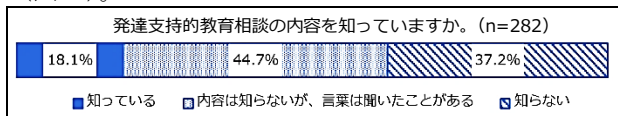


図2 教員における発達支持的教育相談の認知の状況

教員の教育相談の捉えについて、「教育相談と聞いて、どのような取組をイメージしますか」の質問では自由記述で回答を得た（n=282）。内容を分類した

結果、「面談・相談」に関する内容を回答した教員は75.5%と最も多く、教員の教育相談に対する認識を更に広げる必要があると考えた。

現在の校内体制・研修の中で教員が協働して取り組むための工夫についての調査でも、自由記述で回答を得た (n=282)。「特になし」と回答した教員は 93 人であった。これは、回答した教員のおよそ 3 分の 1 に当たる。このことから、協働する場を確保する手立てが必要であると考えた。

3 実践研究に向けて

(1) 研修セット「いつでもどこでも教育相談～4つの『深』で自己指導能力を育てよう～」の作成に向けて

実態調査の結果から、教員は、発達支持的教育相談について、実践に必要な知識や技法の理解を深めることが必要であると分かった。また、教員が意識している働き掛けと児童生徒が求める働き掛けとの間に差があることに着目し、教員が生徒指導の実践上の4つの視点を踏まえて発達支持的教育相談を行う重要性について共通理解を図り、その上で、受容的・共感的な視点から、具体的な手立てを考えることが重要である。さらに、協働して取り組むための工夫を特にしていない教員が多いことから、協働の場の設定が必要である。以上のことから、各校の教員が協働で発達支持的教育相談の知識や技法を学び、実践できるようになるための研修セットを作成した。研修担当者がこれを活用し、教員が児童生徒の自己指導能力を育成できるようにした。

特に協働の場を設定することは有効であると考え
る。教職経験の異なる教員が対話を通して互いの考
え方の違いを知り、共に考え、意見を出し合うこと
で、同僚性が高まり、より良い実践が可能となる。
また、取組上の工夫や改善策等を他の教員と共有す
ることは、指導技術の更なる向上につながる。

(2) 研修セットについて

① 研修セットの内容

研修セットは全校種で活用できるものとし、内容をアからエのように設定した。

- ア 教員の教育相談の知識を深めよう (10 分)
- イ 児童生徒の自己理解を深めよう (10 分)
- ウ 教員の児童生徒理解を深めよう (15 分)
- エ 教員の働き掛けを考え、児童生徒との関係を深めよう (25 分)

ア 教員の教育相談の知識を深めよう

この内容は、自己指導能力とそれを育成するために有効である発達支持的教育相談について理解を深めることを目的としている。生徒指導の実践上の4つの視点を意識し、発達支持的教育相談による日常的・先行的な働き掛けを行うことで、多くの機会で

自己指導能力を育成でき、宮城県の諸課題の未然防止につながっていくことを理解する。

イ 児童生徒の自己理解を深めよう

この内容は、児童生徒が自己理解を深めることの重要性を、教員が理解することを目的としている。教員が、児童生徒用の自己理解を深める活動を体験する。児童生徒が自分を振り返る大切さや、困ったり不安になったりしたときに、自分に合った対応方法を考える大切さを、まず教員自身が理解する。

児童生徒が困ったり不安になったりしたときに必要に応じて他者に相談できるようになるためには、相談する相手の選択肢を増やすことも必要である。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーも児童生徒が相談する相手の選択肢に入ることは、全ての教職員で対応する視点から重要であり、児童生徒に積極的に周知する必要性についても理解する。

ウ 教員の児童生徒理解を深めよう

この内容は、教員が児童生徒理解をより深めることを目的としている。教員自身がうまく関わっていないと感じている児童生徒について、他の教員から見た良さや意外な一面を聴き、多様な視点から児童生徒を理解する大切さを実感できるようにする。

多様な視点から見取ることで、より適切に児童生徒の実態を把握することにつながる。児童生徒理解を深めることは、児童生徒の良さや可能性の伸長に重要であることを理解するとともに、より適切な働き掛けを行うことができるようにする。

エ 教員の働き掛けを考え、児童生徒との関係を深めよう

この内容は、発達支持的教育相談を基にした実際の働き掛けを考え、実践につなげることを目的としている。各自が日々行っている個に寄り添った働き掛けを、生徒指導の実践上の4つの視点に分類し、他の教員と共有する。その中で、1週間実践する働き掛けを各自一つ考える。この活動を通して、他者の実践を知り、自己の働き掛けの手段を増やすとともに、4つの視点を意識することで、より受容的・共感的な接し方に変わることを理解する。

実践後はグループによる協働での振り返りを行い、成果や課題とその対応策を共有することで、より多くの視点から気づきを得て働き掛けを見直し、改善できるようにする。

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターの調査研究¹⁰⁾では、「教員の『授業改善』や『支持的態度』、『保護的規律指導』への取組の充実感が、教員と生徒間の良好な関係の形成や生徒の安心・安全感を育み、生徒の学校生活に肯定的な影響を及ぼしている可能性が示唆される」とある。実践の振り返りを行うことで、取組の充実感を教員が感じることができると考える。

② 研修の実施方法

研修の実施方法については、各校の研修担当者が

実情に応じて、アからエの研修をまとめて一度に実施したり、分割して実施したりすることができるようにした。アの研修は職員会議や打合せの中で共通理解を図り、イからエの研修を研修会として実施することも可能とした。アの研修については、研修動画とリーフレットを用意し、研修会に参加できない教職員が研修内容を理解したり、研修参加者が研修内容を再確認したりできるようにした。専門用語や理論等の説明に不安がある場合は、研修担当者が研修動画を映しながら研修を進めることで、安心して研修会を運営できるようにした。研修担当者にはアンケートフォームを用意し、研修の振り返りや教職員の自己評価に活用できるようにした。

4 実践研究

(1) 模擬研修会の実施

① 目的

発達支持的教育相談の知識や技法を学び、実践できるようにすることで、児童生徒の自己指導能力を育てられるようにする。

② 対象

研修セット「いつでもどこでも教育相談～4つの『深』で自己指導能力を育てよう～」を用いて、以下に示す学校で模擬研修会を実施した（表6）。

表6 模擬研修会の実施校・対象・実施日の一覧

実施校	対象	実施日
A小学校	教員（20名）	10月4日
B中学校	教員（25名）	10月10日
C高等学校	教員（25名）	10月30日

(2) 模擬研修会後のアンケート結果及び成果と課題

模擬研修会に参加した教員にアンケートを実施した。教員が自己指導能力や発達支持的教育相談について理解できたか、発達支持的教育相談の手立てを考案できたか等を調査し、模擬研修会の有効性を検証した。

A小学校とB中学校において模擬研修会後に行ったアンケートの結果は表7のとおりである。

全ての項目において、肯定的回答が95%以上であり、研修セットは、教員が自己指導能力や発達支持的教育相談の理解を深め、実践に向けた働き掛けを考えることに有効であった。自由記述の回答から、アの研修では、実態調査の結果や具体例の提示が説明の分かりやすさにつながっていることが分かった。イの研修では、児童生徒が自己理解を深める場の設定を行う必要性に教員が気付くことができた。一方、「子供に同じ内容の演習を行うことは難しい」という意見が挙げられた。実践しやすい内容・演習にしていける必要がある。ウの研修では、「他者の捉えを知り、多面的な見方の大切さが分かった」等、演習を通して、複数の教員で見取り、児童生徒を多面的に理解することの大切さを多くの教員が実感していた。また、「関わり方のヒントを見付けることができると

実感した」との意見から、エの研修で行う働き掛けを考案する活動にもつながり得ることが分かった。エの研修では、「日常でやっていた行為を理論付けてもらったことで、今後も意識してできる気持ちになった」「他の先生方の実践等も見合い、まねしてみようと思った」等の回答が挙げられ、働き掛けの考案に有効であり、実践や協働への意欲の向上が見られた。その一方で、「学習指導の質を確保しながらできるか不安がある」等の回答もあった。教員が感じる実践への不安を解消する手立ての考案が必要である。

表7 模擬研修会後アンケートの結果

(1) A小学校 (n=15) (2) B中学校 (n=22)

「ア 教員の教育相談の知識を深めよう」の項目				
自己指導能力について、理解できましたか。				
	とても理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった
(1)	73.3%	26.7%	0%	0%
(2)	54.5%	45.5%	0%	0%
発達支持的教育相談について、理解できましたか。				
	とても理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった
(1)	66.7%	33.3%	0%	0%
(2)	59.1%	40.9%	0%	0%
「イ 児童生徒の自己理解を深めよう」の項目				
児童生徒が自己理解する大切さについて、理解できましたか。				
	とても理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった
(1)	60.0%	40.0%	0%	0%
(2)	68.2%	31.8%	0%	0%
児童生徒の自己理解を深める活動を体験してもらいました。参考になりましたか。				
	とても参考になった	まあまあ参考になった	あまり参考にならなかった	参考にならなかった
(1)	46.7%	53.3%	0%	0%
(2)	40.9%	54.5%	4.6%	0%
「ウ 教員の児童生徒理解を深めよう」の項目				
演習を通して、児童生徒理解を深めることができましたか。				
	とても深めることができた	まあまあ深めることができた	あまり深めることができなかった	深めることができなかった
(1)	80.0%	20.0%	0%	0%
(2)	50.0%	50.0%	0%	0%
「エ 教員の働き掛けを考え、児童生徒との関係を深めよう」の項目				
演習を通して、発達支持的教育相談による働き掛けを考えることができましたか。				
	とても考えることができた	まあまあ考えることができた	あまり考えることができなかった	考えることができなかった
(1)	73.3%	26.7%	0%	0%
(2)	54.5%	45.5%	0%	0%
発達支持的教育相談による働き掛けを実践できそうですか。				
	とても実践できそう	まあまあ実践できそう	あまり実践できそうにない	実践できそうにない
(1)	53.3%	46.7%	0%	0%
(2)	36.4%	59.1%	4.5%	0%

2校のアンケート結果を受けて内容を修正し、C高等学校では、研修内容を分割し、短時間で実施する形式で模擬研修会を行った。アの研修では、事前に資料を配布し、模擬研修会では特に重要な点を取り上げて説明した。そして、エの研修では、授業に場面を絞り、実践する働き掛けを考えるようにした。

表8は模擬研修会後アンケートの結果である。アの研修では、発達支持的教育相談の理解について「とても理解できた」の割合が増えた一方、「言葉の意味は理解できたが、具体的なイメージが持てなかった」等の感想が挙げられた。短時間での実施に当たり、具体例を省略したためと考えられる。具体例を精選し、提示する必要がある。エの研修では、働き掛けの考案において「とても考えることができた」の割合が増えた。場面を限定することが働き掛けの考案に特に有効であった。

表8 C高等学校の模擬研修会後アンケートの結果 (n=20)

「ア 教員の生徒指導の知識を深めよう」の項目			
自己指導能力について、理解できましたか。			
	とても理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できなかった
	65.0%	25.0%	10.0%
			0%
発達支持的教育相談について、理解できましたか。			
	とても理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できなかった
	75.0%	20.0%	5.0%
			0%
「エ 教員の働き掛けを考え、児童生徒との関係を深めよう」の項目			
演習を通して、発達支持的教育相談による働き掛けを考えることができましたか。			
	とても考えることができた	まあまあ考えることができた	あまり考えることができなかった
	75.0%	25.0%	0%
			0%
発達支持的教育相談による働き掛けを実践できそうですか。			
	とても実践できそう	まあまあ実践できそう	あまり実践できそうにない
	45.0%	55.0%	0%
			0%

(3) 1か月後のアンケート結果及び成果と課題

模擬研修会に参加した教員に、1か月後にアンケートを実施した。研修会が発達支持的教育相談を意識した働き掛けの実践につながったか、協働の取組の設定が、教員の働き掛けの実践や改善に有効であったか、実践により教員自身や児童生徒に変容が見られたかどうかを検証した（表9）。

表9 1か月後アンケートの結果 (1) A小学校 (n=15)

(2) B中学校 (n=19) (3) C高等学校 (n=13)

①研修会の内容は、日常的な実践につながりましたか。				
	つながった	まあまあつながった	あまりつながらなかった	つながらなかった
(1)	40.0%	60.0%	0%	0%
(2)	36.8%	63.2%	0%	0%
(3)	27.3%	63.6%	9.1%	0%
②研修会で決めた働き掛けは、実践できましたか。				
	実践できた	まあまあ実践できた	あまり実践できなかった	実践できなかった
(1)	40.0%	53.3%	6.7%	0%
(2)	10.5%	63.2%	15.8%	10.5%
(3)	18.2%	81.8%	0%	0%
③グループによる協働での振り返りは、その後の働き掛けに有効でしたか。				
	有効だった	まあまあ有効だった	あまり有効ではなかった	有効ではなかった
(1)	6.7%	80.0%	13.3%	0%
(2)	5.3%	36.8%	42.1%	15.8%
(3)	18.2%	36.4%	27.3%	18.2%
④発達支持的教育相談による働き掛けを実践して、自分の意識の変化は実感しましたか。				
	実感した	まあまあ実感した	あまり実感しなかった	実感しなかった
(1)	33.3%	66.7%	0%	0%
(2)	10.5%	63.2%	26.3%	0%
(3)	0%	81.8%	9.1%	9.1%
⑤発達支持的教育相談による働き掛けを実践して、児童生徒の変化は実感しましたか。				
	実感した	まあまあ実感した	あまり実感しなかった	実感しなかった
(1)	0%	60.0%	40.0%	0%
(2)	5.3%	52.6%	36.8%	5.3%
(3)	0%	36.4%	45.5%	18.2%

①は、肯定的回答が多く、「日々の見取りの参考になった」等、研修内容が日常的な実践につながっていた。アとエの研修のみを実施したC高等学校では、否定的回答も見られた。アからエの研修を順番に全て実施したA小学校・B中学校は、肯定的回答が100%である。研修会の内容が日常的な実践につながるためには、分割して行う形式においても、アからエの研修を順番に全て実施する必要がある。

②は、A小学校・B中学校において否定的回答が挙げられた一方、C高等学校では肯定的回答が100%であった。A小学校・B中学校では実践する働き掛けの場面を学校生活全体から任意に選ぶとした

のに対し、C高等学校では授業の場面に限定した。このことから、場面を限定することにより、意識して取り組みやすくなることが明らかになった。

③は、「自身の中で改善を試みても変化は小さく、他者の意見は重要だと感じた」「ベテランの先生が生徒へ働き掛ける部分がとても参考になった」等、働き掛けの改善に有効であった。一方、否定的回答をした教員16人中14人から「振り返りを実施していない」とする理由が挙げられた。研修会の中で、振り返りを行う重要性を十分に伝えられなかったことが要因の一つと考えられる。また、振り返りの実施は各グループで任意の日に設定するようにしたところ、共通の空き時間を確保することが難しかったとのことであった。振り返りを実施した教員33人中31人が有効性を実感していた。有効性を実感した人数が最も多かったのは、各グループの振り返りを全体で同じ時間に設定した学校であった。振り返りの統一実施日を設定する等の工夫が振り返りの効果の実感を高めることにつながると分かった。

④は、肯定的回答が多く、「一人一人の特性を理解し、声掛けやアプローチを考えるようになった」「自分の意見や経験が正しいと思うことが多くなってきたので、違うことに気付けた」「毎朝のルーティーンになった」等、自己の取組や認識が変化し、取組の習慣化につながっていた。その一方で、「発達支持的教育相談の理解がまだ十分ではなかった」との回答もあり、発達支持的教育相談の十分な理解が、自分の意識の変化を実感するためには必要であった。

⑤は、「声を掛けてくる生徒が増えた」「子供たちが進んで誰かのためになる活動に取り組もうとする様子が見られるようになった」「具体的な相談が増えてきたように感じる」等の回答が寄せられた。児童生徒から声を掛けてきたり、相談をしてきたりすることが増えたのは、発達支持的教育相談の実践を通して、教員が児童生徒の気持ちに寄り添ったことが要因の一つと考えられる。また、他者のためになる活動への取組や教員への相談は、児童生徒が状況を判断し、行動を選択・実行していることから、自己指導能力を発揮している姿である。一方、「短期的な働き掛けだったので、変化の実感までに至らなかった」「変化があっても、それは教員の主観的なものである」とする意見も挙げられた。長期的な実践に加えて、複数の目で児童生徒を見る体制づくりや児童生徒の変容を客観的に測るための指標が必要である。

5 おわりに

(1) 研究の成果

実態調査から、教育相談は特別な機会に行う面談であると教員が認識しており、発達支持的教育相談の内容を理解してもらうことが必要だと分かった。また、教員が意識している働き掛けと児童生徒が求

める働き掛けの間に差があり、児童生徒は受容的・共感的な働き掛けを求めていることが明らかになった。児童生徒が求める働き掛けを教員が実践できるようにするには、生徒指導の実践上の4つの視点を意識した発達支持的教育相談が必要であると考え、それを学ぶことができる校内研修セットを具体化した。この研修セットにより、自己指導能力や発達支持的教育相談について教員が理解を深めることができた。また、授業場面に絞って働き掛けを考えることで実践につながられた。約1か月間、発達支持的教育相談を実践したことで、教員は、個に寄り添って働き掛ける意識に変化し、児童生徒は、自己指導能力を発揮した行動を取る姿が増えるようになった。

(2) 今後の展望

研修セットを長期的に利用することにより、児童生徒と関わる全ての教職員が発達支持的教育相談を有効的に実践し、児童生徒の自己指導能力を育成できるようにしていく。また、児童生徒用アンケートを利用することにより、教員が自分の主観だけではなく、客観的にも児童生徒の変容について分かるようにしていく。

【注釈】

- *1 調査結果の割合は小数第2位を四捨五入しているため、合計しても100にならない場合がある。
- *2 引用文における二重鉤括弧は筆者による。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省(2022)「生徒指導提要」
- 2) 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)」「中学校学習指導要領(平成29年告示)」
- 3) 文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」
- 4) 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編」「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編」
- 5) 文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説総則編」
- 6) 宮城県(2024)「令和5年度宮城県児童生徒学習意識等調査結果」
- 7) 宮城県(2024)「令和6年度全国学力・学習状況調査(宮城県分)結果」
- 8) 宮城県・宮城県教育委員会(2024)「第2期宮城県教育振興基本計画(改訂版)」
- 9) 宮城県(2024)「令和5年度『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』(宮城県分)」
- 10) 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2024)『『生徒指導上の諸課題に対する実効的な学校の指導体制の構築に関する総合的調査研究(令和2・3年度調査)』最終報告書』

【図表等の許諾について】

アンケート調査結果は、研究目的にのみ使用することとし、実践校の校長から使用許諾を得た。

児童生徒の自己指導能力を育てる研究

～全ての教職員で行う発達支持的教育相談を通して～

令和6年度 生徒指導研究グループ 角田市立角田中学校 引地 千枝美 加美町立中新田小学校 鈴木 達也
宮城県角田高等学校 渡部 雄大
相談支援班 赤坂 圭介 泉 順也 一丸 都

背景

生徒指導は、**自己指導能力の育成**を目指す

小学校・中学校学習指導要領解説総則編、高等学校学習指導要領解説総則編

自己指導能力

児童生徒が、深い自己理解に基づき、「何をしたいのか」、「何をすべきか」、主体的に問題や課題を発見し、自己の目標を選択・設定して、この目標の達成のため、自発的、自律的、かつ、他者の主体性を尊重しながら、自らの行動を決断し、実行する力

生徒指導の実践上の**4つの視点**に留意

自己存在感の
感受

共感的な
人間関係の育成

自己決定の
場の提供

安全・安心な
風土の醸成

生徒指導の中心的役割＝教育相談

生徒指導提要

発達支持的教育相談【全体と個】

発達支持的教育相談【個】

個に寄り添った働き掛け

現状

- 一人一人に声を掛け、励ましていますか
 - 一人一人の話をよく聴いていますか
- 小・中ともに97%以上

令和5年度宮城県児童生徒学習意識等調査結果

教員は実施しており、児童生徒も実感している
しかし、現状は..

- 先生や学校にいる大人に相談できる割合は、**全国平均より低い**

令和6年度全国学力・学習状況調査（宮城県分）結果 ※仙台市を除く

- 暴力行為、いじめの重大事態の発生件数は、**全国平均より多い**
- 不登校出現率は、**全国平均より多い**
- 背景は、**多様化・複雑化**

令和5年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（宮城県分）

実態調査

児童生徒の自己指導能力の育成について、全ての教職員で行う発達支持的教育相談の具体化を通して、明らかにする

研究目標

発達支持的教育相談が
あまり知られていない

教員の働き掛けと子供が求める
働き掛けに**差がある**

みんなで取り組む工夫
「特になし」が多い

内容や有効性を知る

有効な働き掛けを考える

協働する場を設ける

研修セット[いつでもどこでも教育相談 ～4つの「深」で自己指導能力を育てよう～]

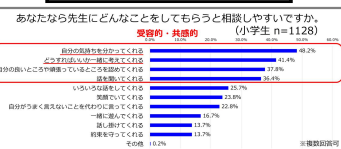
①教員の教育相談の知識を深めよう（10分）

- 自己指導能力の必要性
- 発達支持的教育相談の有効性

国や県の調査結果

宮城県の現状			
質問事項	小学校第6学年 肯定的回答 (%)	中学校第3学年 肯定的回答 (%)	全国との差
困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか	62.7	64.2	-3.3

実態調査結果



②児童生徒の自己理解を深めよう（10分）

- 児童生徒自身が自己理解を深める演習

ワークシート

自分のことについて考えよう（小学3～6年生用）

() 好きなこと () 得意なこと () 苦手なこと () 困りごと

1. 自分の好きなこと・得意なこと・嫌いなこと・苦手なことを書きましょう。
好きなこと・得意なこと 嫌いなこと・苦手なこと

「自分のことについて考えよう」（教員用）

1. 準備時間 児童生徒用ワークシート（A4用紙）
2. 活動時間 組や班の話し合い、学校送迎時の時間（実施時間は10分程度）
3. 活動の目的

(1) 目標を設定し、達成させる。

書き方は、自分のことを振り返ることから始めます。
書き方は、自分のことを振り返ることから始めます。

(2) ワークシートを参考に、自分の好きなこと・得意なことを書きましょう。
自分の好きなこと・得意なことを書きましょう。

自分の好きなこと・得意なことを書きましょう。
自分の好きなこと・得意なことを書きましょう。

③教員の児童生徒理解を深めよう（15分）

- 教員が児童生徒理解を深める演習

演習

ちょっと見方を変えてみましょう

悩みや不安を抱える児童生徒の良い面や意外な一面について、他の先生方から、できるだけたくさん出してもらいましょう。

④教員の働き掛けを考え、児童生徒との関係を深めよう（25分）

- 4つの視点を意識した発達支持的教育相談の働き掛けを考える演習

4つの視点シート

自己存在感の感受	共感的な人間関係の育成
自己決定の場の提供	安全・安心な風土の醸成

演習

明日から授業で実践する個に寄り添った働き掛けを考えましょう。

○4つの視点の中から1つ視点を選びます。
○働き掛けを1つ考えます。

校種別に研修スライドを用意

小学校

中学校

高等学校

2つの形式を用意し、各学校の実情に応じて使用可能

まとめて

4つの内容をまとめて
60分で行う

分けて

4つの内容を分けて
短時間で行う

検証

模擬研修会後アンケート結果 (n=57)

質問項目	肯定的回答
自己指導能力について、理解できましたか	96.5%
発達支持的教育相談について、理解できましたか	98.2%
演習を通して、発達支持的教育相談による働き掛けを考えることができましたか	100.0%
発達支持的教育相談による働き掛けを実践できそうですか	98.2%

模擬研修会1か月後アンケート結果 (n=47)

質問項目	肯定的回答
研修会の内容は、日常的な実践につながりましたか	97.8%
研修会で決めた働き掛けは実践できましたか	87.3%
発達支持的教育相談による働き掛けを実践して、自分の意識の変化は実感しましたか	85.1%

成果

- 教育相談に対する教員の認識を広げることが必要であることや受容的・共感的な働き掛けを児童生徒が求めていることが分かった
- 研修セットにより、自己指導能力や発達支持的教育相談について教員が理解を深めることができた
- 実践する働き掛けを授業場面に絞って考えることで実践につながれた
- 教員が個に寄り添って働き掛ける意識に変化し、児童生徒が自己指導能力を発揮した行動を取るようになった